

【方法の選択】

生活教育の実践の面白いところは、その方法の多彩さです。何か教育の方法をひとつ思い浮かべてみてください。生活教育では、それにとらわれず、すぐ広げます。「一時での指示はひとつ」という方法はよく使われています。教育実習でも、実習生がごちやごちや指示して子どもが混乱するとき、ひとつの指示を明確に出して徹底しなさいと「指導」がはいることが多いでしょう。

生活教育では、両極を考えます。一時にくつも指示する方法もあるだろうし、場合によつたら指示しないこともあるかもしれません。そうすると、この両極の幅の中で、いろいろな指示の方法があることがわかり、その多彩なバリエーションの中からひとつ選ぶ、

という豊かな選択肢をもった教師になります。はじめに考えた方法の弱点もわかり、ひとつの方法を絶対化して視野を狭くすることや「定型化」からも逃れられます。「一時での指示はひとつ」の方法を積み上げれば、「授業書」のようなマニュアルができ、子どもた

生活教育 キーワード

ちを「上手に」「動かす」ことができるようになるかもしれません。でもそれは子どもたちから、迷う機会別のことをする機会、そして何のための指示かを考える機会を奪い、「指示待ち人間」を育てているかもしれません。では、バリエーションの幅の中でどれでもいいかという、そうでもありません。目の前の子どもたちをよく見て、それに合わせるのです。子どもも理會、発達研究が方法選択の基準となります。

私たちが、ハウツー本や授業書からも（学ぶ）ことができるのは、「ええーっ、ちがうやり方もあるんじゃない」と書いていない方法を思い浮かべられるのと、その違和感は子どもも持つだろうと感じて、子どもを想定したちがう方法に修正して考えるきっかけにできるところでしょう。

（研究部・加藤聡一）

〈参考文献〉

- ① ルソー（著）野一雄訳「エミール（上）」岩波文庫、岩波書店、改版〇〇七年（原書一七六二年、一七一、一七三、一七四〇ページ）。
- ② 九鬼一人「新カント学派の価値哲学 体系と生のはざま」弘文堂、一九八九年。リッカート哲学のまとめ。デューイが批判した価値論。教科論。三九ページ。